こゝに便宜上少しく説明を付して置かねばならぬが、一體前世紀の半頃から非常な進歩をした印度歐羅巴語學に於ては、言語の分類に關しても非常に都合好く纏まりのついて居たもので、印度以西に於る同語族の間に八派十種の區別を立て、而して此の間に大きく東西の二大派卽ちサテム語派とケンツム語派とを別けたものである、此の二派の區別は東西兩者の古語を比較して見ると、サテム（Satem イラン語 百の義）、ケンツム（Centum ラテン語 百の義）の語が示すやうに、一方でSの音をもつて居るものに對して他方ではKの音をもつて居るものが多いといふ現象を基にして、東の派をサテム派、西の派をケンツム派と呼ぶことになつたのである、さて上に述べた新發見の結果によれば、此の八派十種語の區別は勿論變更しなければならぬのであるが、更に此の都合よく出來て居たサテム・ケンツムの東西兩大別をも亦變更しなければならぬことになつて來たのである、何故かといふに、一九〇八年に於ける獨逸のジーグ（Sieg）及びジーグリング（Siegling）二氏の研究によると、此のトカラ語（實は龜茲語、焉耆語）といふものは、他の東方印歐語と同樣にサテム派に屬するものではなく、却つてケンツム派に屬するものであるからである、今試みに二三の數詞を比較してその實例を示して見ると、

Kanta（龜茲語 100）；希臘語 ε-κατον，拉典語 Centum，ゴツツク語 hund（h<k），梵語 Śata，イラン語 Satem，スラブ語 Suto，リタウ語 Zsimtas

Śäkä（龜茲語 10），Śakä（焉耆語 10）；希臘語 Sεκα，拉典語 decem，ゴツツク語 taihun；梵語 daśa，スラブ語 deśeti，リタウ語 deszimt

okätä（龜茲語），希臘語 Οκτο，拉典語 octo，ゴツツク語 ahtau（h<k），梵語 aṣṭâ，aṣṭau，リタウ語 asztuni